

グルーシーからカバニス、メヌ・ド・ビランへ
——共感概念の変容とその意義を巡って——

北海道大学 長坂祥悟

はじめに

18世紀、「共感 (sympathie)」は大きな変貌を遂げる。道徳の世俗化が要請されたこの時代に、共感是有機体を為す親和力としての自然学的概念を超えて、人間の道徳性をも理解する概念として重要性を増していった。この変貌に寄与した一人がアダム・スミスであるのは論を俟たない。彼の道徳的共感¹⁾は18世紀後半フランス思想の内に受容され、その影響はメヌ・ド・ビランの道徳論にまで及ぶ¹⁾。

しかしながら、ビランの共感²⁾はスミスの共感とその内実³⁾に相違がある。確かに両者は共感を人間の自然本性として捉えている。ところでスミスが共感として考えるのは想像力による立場の交換だ。実際、彼は「想像力によってわれわれは、われわれ自身をかれの境遇におく」(I. i. 1. 2.)²⁾と言う。その一方で、ビランの共感⁴⁾は専ら生理的作用であり、想像力といった知的能力からは全く区別される。「人間は、同意と名付けられる非常に自然な共感によって自分の同類と関わる。」(A, X-1, 108.)³⁾続けてビランは、共感が人間の道徳的な生⁵⁾に対置される「有機的、動物的生」に属するとさえ言う (ibid.)。ビランの共感とは動物的本能と同じ水準にあるのだ。

共感を巡る両者のこの隔たりは如何なる経緯で生じたのか。これに答える為⁶⁾に我々は、18世紀フランスにおけるスミスの共感概念の変容を見る必要がある。この変容の推移を我々はソフィー・ド・グルーシー(コンドルセ夫人)、カバニスそしてビランへと至る系譜の内に見る事ができる。グルーシーは『道徳感情論』を仏訳し、フランスにおけるスミス受容に大きく貢献した⁴⁾。のみならず彼女は妹婿でイデオロジストの領導的思想家カバニスに対して「共感についてのカバニスへの書簡」(以下、「書簡」)を送る。彼女はそこでスミスの共感⁷⁾に対して批判的な見解を示す一方で、共感を感覚性に基礎づける。さらにカバニス⁸⁾と言えば、メヌ・ド・ビランの思想形成に多大な影響を与えた哲学者であり、同時にビランにとっては克服すべき論敵でもある。ビランとカバニスとのこの思想史的關係性は共感についても同様である。

これらの事から共感を巡って、グルーシー、カバニス、ビランの間に強い思想史的關係があると十分想定できる。本稿において我々は、この系譜を辿る事でスミスの共感⁹⁾が如何に変容し、如何なる意味をもつに至ったのかを論じる。そして最後にその変容が彼らの道徳論¹⁰⁾に対して如何なる意義を与えたかを簡単に考察する。

1. グルーシーにおけるスミス批判の意義と共感論

グルーシーのスミス¹¹⁾解釈は必ずしも彼に忠実ではない。事実、彼女の解釈はスミス¹²⁾解釈として否定的に評価される事がある。瓜生は「コンドルセ夫人〔ソフィー・ド・グルーシー〕のスミスの道徳感情論批判は、同感〔共感〕理解そのものの違いから発しており、全くの誤解から発していると見るべきであろう」⁵⁾と述べ、この誤解の背景にはスミスが想定したイギリスの市民社会の先進性とグルーシーが生きたフランスの市民社会の後進性との違いがあると論じる。

確かに、この二人の共感に対する理解が根本的に異なるという瓜生の評価は正しい。しかし、次の記述はこの相違が彼女の誤解や誤読に基づくものではなく、むしろ彼女の意図に基づく事を我々に明かす。

そうしてついに、私は敢えて〔翻訳に〕取り掛かりました。しかし、エディンバラの哲学者〔スミス〕の考えに従うのではなく、私は自分の考えに身を委ねました。共感についてのその章を読んで、私は同じテーマで異なった章を作りました。〔…〕私が言うのは、私達〔著者とスミス〕を判断する事ではありません。私は比較論を主張するつもりは毛頭ないわけですから。(L, 435.)⁶⁾

彼女の意図はスミスの共感論に注釈を加える事や対案を示す事ではなく、むしろスミスの議論を起点に彼女自身の道徳論を構築する事にある。だから我々は、彼女がスミスの共感概念を批判的に受容したというより、スミスの共感に触発され、彼女自身の共感論を構築したと言うべきなのだ。

このようにグルーシーが「自分自分の考えに身を委ねる」のは、彼女がスミスの共感に不満を抱いていたからに他ならない。では、その不満とは何か。

スミスはその〔共感の〕存在を指摘し、その主要な結果を示すだけに留まりました。私は、彼が敢えてより高みへと遡らなかった事、共感の第一の原因まで洞察しなかった事、ついには共感がどのようにして感性的で、かつ反省をも備えたすべての存在に具わっているかを示さなかった事を残念に思いました。(ibid.)

彼女の不満とはスミスが共感に係る諸々の事態を示す一方で、その「原因」を論じなかった事だ。グルーシーにとっては、この原因の攻究こそ重要なのだ。では、共感の原因とは何か。グルーシーは共感を次のように定義する。「共感は私達が持つ、他人の方法と似た一つの方法で感じる素質です。」(L, 435.)。彼女によれば、他人に共感するという事態は、他人の特定の状況に応じた自らの感覚性に基づく印象を想起する事だ(L, 435-437.)。例えば他人の苦痛に対する共感とは、自身が既に経験した苦痛の印象を想起する事だ。つまり、共感は無感覚には成立し得ない。故に、彼女は共感の原因を感覚だと言う。「共感の第一の諸原因は快楽や苦痛が私達に抱かせる諸感覚の本性から派生します。そしてまず、感性的諸存在としてこそ、私達は身体的害悪、人間達の間で最も共通した諸悪に対して共感しうるのです。」(L, 441.)我々が共感するのは我々が感覚を備えた存在、感性的存在として存在する限りである。従って、共感グルーシーにとって視覚や聴覚等の感覚的経験と同じ地位にあるのだ。

ところで何故、彼女はスミスの共感概念に不満を抱きながら、この概念に賭けるのか。それには18世紀フランス啓蒙におけるモラル・センスを巡るディドロとエルヴェシウスの論争が影響している⁷⁾。ディドロがシャフツベリーのモラル・センス論をフランスへ紹介した後、エルヴェシウスはモラル・センスを事実に基づかず、故に忌避すべき神学的概念と何ら変わらないと批判する。このエルヴェシウスの批判に反論してディドロは、道徳感情の座として「横隔膜」を持ち出す⁸⁾。すなわち、ディドロはモラル・センスを人間の有機的器官に内属する自然的な感覚とする事で、モラル・センスが決して神秘的なものではないと示そうとしたのだ。

グルーシーによる共感概念の規定は、ディドロのこの発想に連なるものと見る事ができる。つまり、グルーシー共感の「第一の原因」を探るのは、ともすれば神秘的・神学的なものとして誤解される危険がある共感を自然の内部で理解する為であり、それによって共感が世俗的な道徳論の基礎に資するもの

だと示す為だったと考えられる⁹⁾。

では、この共感から道徳性は如何に形成されるか。グルーシーが諸感覚と同等と見做す共感、見知らぬ他者への感情移入を意味し、社会的な連帯を可能にするスマスの共感とは異なる。とはいえ、グルーシーは見知らぬ他者への感情移入としての共感を考慮しない訳ではない。この役を、本性的な共感である「個別的共感 (*sympathie individuelle*)」と対比される「全般的共感 (*sympathie générale*)」が果たしている。そしてそれは前者と比してより道徳的な共感と言える。

親愛なるカバニス様、私が貴殿に本日お話ししたいのは、個別的共感についてです。それは、人間同士に人間の完成と幸福に必要な内密なこの絆を築くものであり、最も甘美な情感によって心を近づけて結びつけるものであり、そして、全般的共感よりも直接的な関係に基づき、全ての人間により容易に備わっているものです。また、それは、もしより陶冶されたものだったならば、人間性全体の悪や欲求に対して感じやすくなりえたでしょう。(L, 450.)

我々が注目するのは、個別的共感が「もしより陶冶されたものであったならば、人間性全体の諸悪や欲望に感じやすくもなっただろう」という証言だ。裏返せば、直接的に関わる身近な人の事柄へのこの「個別的共感」を「陶冶する (*cultiver*)」事によって、「人間性全体」の事柄への共感が可能となる。つまり、感覚性に依拠する共感、陶冶を契機として、その対象を人間全般へ拡大する事ができる。

この「陶冶」を担う能力が「反省」だ。

親愛なるカバニス様、共感 [...] は、私達に感覚性と同程度の反省の能力がなければ、[共感が] しばしば有用である程にはあまりに持続しない感情だったでしょう。しかし、反省は、私達の感官が私達に与える諸観念を持続させるようにして、私達の内、苦痛を見る事の効果を上げかつ保存し、いわばこの反省こそが、私達を実に人間的にするものなのです。実際に、反省こそが私達の目が一瞬しか見ていなかった悪の現前を私たちの魂の中に固定するのです [...]。(L, 442.)

反省は感覚の印象を持続させ、記憶し、想起させる知的能力だ。これが共感の一過的な感覚的印象(例えば苦痛等)を保存し、そこから生まれる道徳観念(例えば悪等)として固定する。かくして一度生じた個別的共感、反省を通じてより対象の広い全般的共感へと変容する。この共感の移行を為すものこそ、陶冶なのだ。

ところで彼女によれば、理性と感覚性の同時的な完成が真に人間をよりよくする (cf. L, 434.)。この事こそ彼女の道徳論の眼目だ。陶冶は自然な感覚性をこの人間性の完成に向けて方向づける事とも言える。

従って、人間性の感情は、ある種、自然本性によって人間の心の根底に託され、反省する能力が受胎させ、発展させていく萌芽なのです。(L, 443.)

人間性は反省によって育成されねばならない。しかし、その萌芽は自然本性の内にある。自然本性に抱かれたその萌芽こそ、共感に他ならない。従って、人間性の完成、道徳性は共感の反省を通じた陶冶によって形成されるのだ。

2. カバニスにおける生理学的共感

では、グルーシーの「書簡」の相手カバニスの共感概念はどのようなものか。カバニスも共感を感覚性に基づく人間本性として理解する。この理解に我々はグルーシーの影響を看取できる。

スマスはそれ〔道徳的共感〕について鋭敏さを備えた分析を行ったが、但しこの分析は、それ〔原理〕を身体的法則と関連付けなかった為に、不完全に終わってしまった。だがコンドルセ夫人〔グルーシー〕は平易な合理的考察によって、『道徳感情論』が依然そのままにしていた曖昧さから、この原理のあらかた引き出す事できた。(OP, I, 575-576.)¹⁰⁾

注目すべきは、スマスに対するカバニスの批判がグルーシーのそれと一致する点だ。カバニスも共感の原理を「身体的法則と関連付けなかった」としてスマスを批判する。これに対してグルーシーの考察は、共感の原因を感覚性と明示した故に評価される。この評価から、カバニスにおけるスマスの共感の受容はグルーシーに大きく依拠すると推測され得る。

但しカバニスにとって共感はいくまで生理学的な概念だ。彼において共感とは感覚性に基礎づけられるというより、むしろ感覚性の一側面に過ぎない。つまり、道徳的共感もまた感性的な共感と根本において同じものだ。だが、ここで留意すべきは彼の感覚性が人間の経験全般を基礎づける原理であり、生氣論的な意味を持つ事だ。

そもそも彼が領導するイデオロジー (idéologie) は、コンディヤックに倣って生得観念を否定し、人間の感覚的経験から「観念 (idée)」とそれによる認識が如何に生じるかを解明しようとする学派だ。その彼らにとって人間は第一に「感覚する」存在である。故に、感覚性から人間存在の諸様態を説明する事が、彼らの基本路線となる¹¹⁾。

カバニスにとっての感覚性とは身体的なものと精神的なものの共通の源泉だ。「身体的感覚性は、生命現象の研究において、またその真の連鎖の体系的探求において到達する最終項だ。[...]従って身体的なものと精神的なものとは、その源において渾然一体となっている。あるいはより適当に言うならば、精神的なものとはより特別な視点での身体的なものに他ならない。」(OP, I, 142.) 故に感覚性は、人間の存在全体を探究する出発点に相応しい。そしてこの感覚性を探究する生理学こそ人間探究の学に相応しいのだ。

しかし、カバニスの感覚論はコンディヤックのそれとは一線を画す。何故なら後者が生得的なものを排除するのに対し、前者は感覚性を経験の原理としていわばア・プリオリに認めるからだ。この相違は、本能を巡る二人の見解の相違に現われる。コンディヤックの本能は単に習慣によって形成された「自動的行動パターン」に過ぎない¹²⁾。他方、カバニスの本能は人間が生物として存在し始める時、例えば胎児の時から感覚性の一側面として既に与えられている原初的な生理的欲求だ。つまりカバニスの感覚性とは生ける存在の内にも存する本源的な所与、経験全般を可能とする一種の生命原理なのだ。

カバニスの共感はまさにこの本能と同等の水準にある。

一つの生きた存在が同種あるいは異種の他の存在へと向かう傾向として、共感¹³⁾は本能の領域に含まれる。その最も広い視点の下で共感を考えるならば、それはいわば本能そのものなのである。(OP, I, 565.)

本能とは、動物全般がもつ組織化の作用である。この作用は栄養摂取等個体の組織化と群れを成す等の集団的な組織化双方に関わる。この意味での共感が生理学的概念なのは明らかだ。とはいえ、このような共感の用語法はカバニスに固有のものではない。有機体の組織化、またそれを成す親和力としての共感¹³⁾は少なくとも『百科全書』の時代までは一般的であった¹³⁾。むしろカバニスの独自性は、共感が生理的であると同時に道徳的でもありうる点にある。確かに道徳的な共感はある種の欲望、欲求に他ならない。しかし、それは必ずしも利己的な欲求ではない。それは他者と連繋する社会的な本能でもある。

道徳的共感¹⁴⁾は他者達の諸観念と諸情感を共有する機能、すなわち彼らに自分の観念と情感を共有させる欲望、彼らの意志に働きかける欲求に存する。(OP, I, 576.)

さらにこの道徳的な共感¹⁴⁾は、「模倣」の能力という実践的側面をも有する。模倣と共感¹⁴⁾はそれぞれ感覚性の一側面であり、根源的には同一だ。それでもカバニスの模倣¹⁴⁾は、行動を再現する自然な素質と特徴付けられる。その内、他者への模倣¹⁴⁾は他人の顔つきや声の調子等その人の情感を外部へ示す「記号 (signe)」を媒介として、それらによって表現される他者の情感そのものをも己の内に再現する。

実際に、人が一人の人間の道徳的情感と結びつく時、人は、少なくとも表面的にその情感を生み出した知的操作を繰り返す。つまり人はそれを模倣する。同様に、模倣の能力がより高い度合いでその内に認められる人物達は、同時にその人の想像力によって最も迅速に、最も容易に、そして最も完全に、他者の立場に身を置く人物だ。(OP, I, 576.)

ここで「知的操作」と言われるのが上述の「記号」だ。人は例えば、他人の苦痛による表情や声を模倣する事によって、他人が抱く苦痛を知る事ができる。さらにこの模倣¹⁴⁾は、カバニスによれば、その反復によって模倣それ自体の能力を強化する事ができる。だからこそ、他人への模倣の反復は、他者の立場や状況に対する理解をより容易かつ迅速にするのだ。模倣¹⁴⁾が漸次的に修練される点はその特筆すべき性質だ。この特性は社会的調和を生み出す作用、スタウムの言を借りて言うならば、「共感の陶冶」あるいは「利己心の啓蒙」とも言えるだろう¹⁴⁾。

3. メーヌ・ド・ビランの共感概念と道徳論

ビランにおける共感¹⁵⁾は、初期思想においてさほど重要なものではなかったが、1805年から1807年の間に重要な主題となる¹⁵⁾。特にベルジュラック医学会で発表された『曖昧な諸知覚についての覚書 (以下、『覚書』)』(1807)において共感¹⁵⁾は主題的に扱われる。そこでの共感概念の特徴はカバニスのそれとまさに一致する。ビランは胎児と母体との生理的親和力としての共感¹⁵⁾

提示した後、「共感はその最も近い原理を模倣の傾向性の内に持ち、共感是有機化された自然の始原的な法則であるように思われる」(A, V, 31.) と言う。共感と模倣とが殆ど同一視されるのはカバニスの論と重なる。

ところで、この親和力としての共感には確かにブッカーが言うように、ルネサンス的要素を見出せる¹⁶⁾。但し、その直接的源泉はカバニスの生理学的共感にあると我々は言い添えねばなるまい。事実、ビランの共感についてカバニスからの影響は、次の記述からして、明示的かつ自覚的だ。

道徳的共感は、医学哲学者カバニスが言ったように、この差し迫る欲求から派生する。そしてこの欲求は、非常に早い時期から各個体が抱くものであり、自分の同類の意志に対して働きかけ、彼らの意志を自分自身の意志に結び付けようとする欲求である。(A, V, 38.)

紛れもなくこの「道徳的共感」の規定はカバニスのものだ。さらにビランは共感を感覚性の一側面として、専ら感性的な動物的生の作用と位置付ける。

従って、模倣の原理と同一である共感の原理は、[...] 情感的諸印象のこの階層の最も変化に富んだ諸現象全てを含む。別様に言えば、共感的な諸現象の共通な原理は感覚的ないし動物的生の原理の他ならない。(A, V, 36.)

この 1807 年の記述は、後期思想に位置付けられる『道徳と宗教の基礎に関する諸断片』(1818)における記述とも符合する。共感(と同義の「同意(consensus)」)は「未だ意識ではない。それは直接的には有機的動物的生に由来する。そして実際に、動物達、とりわけ社交的な種の動物は彼らの間で人間の中でさえよりも強く、より際立っている一種の外向的な本能によって共感し、あるいは同意する。」(A, X-1, 108.) 従って、カバニスにその大部分を負うビランの共感概念の特徴は彼の後期思想においても維持されているのだ。

しかし共感と道徳性の関係を巡っては、ビランはカバニスを批判する。ビランはカバニスが共感を他人の意志に働きかける欲求と規定した事に関して次のように言う。

しかしここで、私は諸原理についてある奇妙な混乱を見出す。この混乱はとりわけ意志という用語の固有な意味が全く逆転している事、そしてこの能力の固有な諸操作が全体としてその本性的な諸基盤から離れてしまっている事に由来する。(A, V, 38.)

ビランが言うこの「混乱」とは何か。まずはビランの意志概念を見ねばなるまい。ビランにおける意志は身体運動の相関関係の中で能動的な自己原因として感知される。この自己原因の内的な感知こそビランにおける自我の存在の感知に他ならない。彼が言う意識的生とはこの能動性としての自我が感知される生の様態だ。しかし、共感が直接的に由来する「有機的動物的生」は感覚性が受容する外的諸印象(光や音、匂い等)に触発される受動的な生だ。この生において身体は外的諸印象の触発を被る故に、意志は自己原因として

感知されない。故にビランは感覚性による生の経験と意志によるそれを原理的に区別する。すなわち、感覚性ないし共感と意志は全く別種の経験を成す、異なる力なのだ。

他方、カバニスによれば意志と自我は共感と同等の水準にある。「共感は一般的に、自我や意識、少なくとも曖昧である意志の感知から派生する。」(OP, I, 568.) 結局、カバニスの意志や自我は、生理的反応における神経系の中核として想定されるものでしかない¹⁷⁾。

要するに、ビランがカバニスに負う点は、共感が感覚性に基づく親和力である点である。しかし、ビランは共感を意志と原理的に区別する点においてカバニスから離反する。

さて、ビランのこの共感とは、彼の後期道徳論において重大な意義を有するに至る。1815年以降、ビランは専ら内的に確証される自我の実存と他者との関わりをも有する社会的な存在としての自我を共に引き出し得る道徳論の構築を課題とした¹⁸⁾。その中でカバニスから受け取った他者と関係する本能としての共感が、自我と他者とを共通の地平に置く重要概念として浮上するのだ。本稿冒頭の引用を再掲する。「人間は、自分の同類と同意と名付けられる非常に自然な共感によって関わる。」(A, X-1, 108.) 共感が生命における所与である感覚性に位置付けられるのならば、共感によって関係付けられる「同類」もまた感覚性を有した生ける存在である限りにおいて所与の存在だ。かくして共感概念によって、自我と他者との関係性は生命に基盤における所与として見做され得るのだ。

しかし、共感それ自体が道徳の基礎なのではない。それは道徳の基礎の一つに過ぎない。「自我の能動性に同意ないし共感が付け加われば、モラリスト達、とりわけ内的な道徳感覚を認める人々が与えた意味での意識を持つ事になるだろう。」(ibid.) ビランにとって道徳性が宿るのは「道徳的意識」においてである。この意識は他者を介した自己意識だ。道徳的意識とは「いわば他者の内で、自分の像をその人に反射する生きた鏡の内でのように、自らを二重化し、いわば自らを見る自我の意識そのものに他ならない」(A, X-1, 110.)。この意識の成立には自我が内的に感得されるだけでなく、それに先立って自我に他者が関係付けられねばならない。この関係性を為すのがまさに共感なのだ。この意味でこそ共感とはビランが論じる道徳の基礎的な一概念と言える。それ故、ベルッシのこの言は正しい。「従って、道徳に対して二つの原理がある。共感と能動性だ。あるいはこう言ってもいいが、道徳の原理は能動的共感ないし意識的共感と言う事もできる。」¹⁹⁾

結論

かくして我々はスミスからフランスに受容された共感概念が、グルーシーによって感覚性の概念の内に包摂され、その後カバニスによってその生理学的側面が強められ、ビランへと継承されていく様子を看取できる。この変容は共感概念が再び自然学的な概念へと戻るようにも見える。しかし重要なのは、共感が単に感覚性に基づく概念であると同時に、それが他者との紐帯を説明する概念でもある事だ。他者との連帯、社会性の原理としての共感とはスミスにも共通する。しかし彼らは、共感を感覚性に紐づける。それにより他者との連帯、社会性の源泉は人間本性の内に内在化される。この点はスミスにおいて必ずしも顕著ではないだろう。従って、スミスの共感に対する奪胎換骨の意義は他者との関係性、社会性を感覚性という明確な一つの人間本性に基礎

づける試みと言えるだろう。

とはいえ、彼らは道德性の成立を感覚性のみを求める訳ではない。グルーシーにおいては、共感が反省的能力によって社会的に望ましい方向へ発達させる事が期される。彼女の陶冶とは、こうした事柄だ。カバニスの論においても模倣がこれと似た意味で共感の陶冶と見做されうるかもしれない。しかし、この模倣は結局のところ感覚性と起源を同じくする。それ故、カバニスにおける感覚性と道德性の間には確かに曖昧さがあると言えよう。ビランのカバニスに対する批判はこの点に関わる。ビランにおいて道德は共感が能動的な意志との関係する限りにおいて存する。彼にとっては意志と結びつく共感こそ道德の基礎に相応しい。この基礎においてこそ人は原初的に他者と関係し、その関係の中で、いわば他者を見る、また他者から見られるという関係において、自らを反省するのだ。

かくして我々は、スミスの共感から変容した共感概念は内在的自然としての道德の基礎となったと言える。そしてこの変容は他者との社会的関係を自然な内在性として捉える視座を道德論に提供したと言える。

註)

1) Margo Piazza, “On Sympathy and Attention: Maine de Biran, Reader of Adam Smith and Dugald Stewart”, in *Towards a new anthropology of the embodied mind: Maine de Biran's physio-spiritualism from 1800 to the 21st century*, ed. Manfred Milz, Brill, Leiden, 2023, p. 89.

2) アダム・スミス『道德感情論』(上)、水田洋訳、岩波文庫、2003年、25頁。

3) メーヌ・ド・ビランの著作からの引用は Vrin 社刊行の Azouvi 版全集を用いる(略号:A)。引用箇所はローマ数字で巻数を、算用数字で頁数を示す。尚、イタリックの強調は傍点で示す(以下の引用でも同様)。

4) 実際にビランが読んだ『道德感情論』はグルーシーの翻訳と推測される。cf. *Œuvres complètes Maine de Biran*, éd. P. Tisserand, Slatkine, Genève, t. XII, p. XVI.

5) 瓜生洋一「コンドルセ夫人の『同感』概念の理解について」『九州工業大学研究報告 人文・社会科学』25号、九州工業大学、1977年、76-77頁([]内は引用者の補い。以下同様)。

6) グルーシーの「書簡」からの引用は«Lettres à Cabanis sur la sympathie», in *Théorie des sentiments moraux*, tra. par M^{me} de Grouchy et mise de Condorcet, Guillaumin et Cie, Librairies, Paris, 1860 [初版: 1798年] (略号:L) による。

7) エルヴェシウスとディドロのモラル・センスを巡る論争は、安藤隆穂『フランス啓蒙思想の展開』、名古屋大学出版会、1989年、63-76頁に詳しい。

8) cf. Diderot, *Œuvres complètes de Diderot*, éd. par R. Lewinter, Club français du livre, Paris, t. XI, 1971, p. 528; 「エルヴェシウス『人間論』の反駁(抜粋)」野沢協訳、『ディドロ著作集』第二巻、法政大学出版局、1980年、323頁参照。

9) cf. F. Alengry, *Condorcet: Guide de la Révolution française*, V. Giard & E. Brière, Paris, 1903, p. 739.

10) カバニスの著作からの引用は *Œuvres philosophiques de Cabanis*, PUF, Paris, t. I., 1956, [初版: 1802年] (略号: OP, I) による。

11) 村松正隆「感覚性・共感・模倣——カバニスの人間学を巡って——」『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』創刊号、2003年、108頁参照。

- 12) コンディヤック『動物論』、古茂田宏訳、法政大学出版局、2011年、訳註 58、200-201頁参照。
- 13) cf. *Encyclopédie, ou dictionnaire raisonné des sciences, des arts et des métiers*, t. 15, Bad Cannstatt, Stuttgart, 1967 [初版：1765年], pp. 735-740.
- 14) M. S. Staum, *Cabanis. Enlightenment and medical philosophy in the French Revolution*, Princeton University Press, Princeton, 1975, p. 190.
- 15) cf. B. Bouckaert, « L'itinéraire de la sympathie » in *Revue Philosophique de Louvain*. 4e série, t. 103, n.1-2, 2005, p. 111.
- 16) cf. Bouckaert, *op. cit.*, pp. 106-107.
- 17) cf. OP, I, 559. 「[...] この共通の中枢において、反応は意志という特徴を帯び、そこでこそ結果として自我が住まう [...]。」
- 18) cf. *Journal, Maine de Biran*, éd. H. Gouhier, t. I, Éditions de la Baconnière, Neuchatel, 1954, pp. 86-87.
- 19) B. Baertschi, *Conscience et réalité. Études sur la philosophie française au XVIIIe siècle*, Droz, Genève, 2005, p. 251.